ナルちゃんの体験学習する機会が、たった１日であっても、あっという間に減ります。

赤ちゃんだけではありません。赤ちゃんを育てる母親にも、そんなアンテナが伸びていきます。たとえ交通量の少ない田舎道を走るといっても、赤ちゃんを運ぶ道具としての自転車が、母にはとても「あぶないもの」と映るらしい。姪の改心（？）を促したいのか、「あぶない」と何度もこぼします。これでは、姪の母親としての体験学習をもそぎかねません。

その様子をアメリカで幼稚園勤めの三女に話して聞かせると、「お母さん、子どもにあまり大人が手を貸しては、成長の妨げになることもあるから気をつけないと」と注意されました。大人が赤ちゃんの行動の先を読み取って手を出すというのは、「赤ちゃんの自発性をそぐという反面を持ち合わせている」が、その理由だそうです。これは、親として成長しようとする、大人に対しても言えるかもしれません。

＜先に言わないで＞

そう言えば、私にも覚えがあります。子ども達に「今からしようとしていることを、先に言わないで」と、よく注意されました。

アメリカでは、15、16 才にして運転免許を取り始めます。とくにカルフォルニア州では、公共の交通機関が極端に少ないため、移動の手段として車に頼らざるを得ません。高校生になったばかりの子どもに、安くない車を１台与え、運転を任せるというのは、「安全面」と「金銭面」の両方で、とても勇気のいる決断です。それでも、親に頼らず、自分で考えて行動することは大事なことなのだから、子どもを信じて（！）、免許取得に手を貸します。

仮免許中、助手席に座った私の緊張感は、左折信号機（アメリカです！）のないインターセクションでピークに達します。自分が運転しているつもりになってしまい、つい「今、出るのよ」と声を出してしまいます。「お母さん、私も緊張しているんだから、突然声をかけられたらびっくりするじゃない。やめてよね。」「あー、ごめんごめん。」「すんでから謝っても、遅いでしょ。私がやろうとしている先に、お母さんが言わなくてもいいの！」

その左折のタイミングで私が子どもに声をかけてしまうのは、私自身の安心感を得るための「先走り」です。そのタイミングは私自身のものであり、子どものそれではありません。子どもに運転を習わせるのなら、子ども自身の安全感覚を養わなくてはなりません。さもないと、いつまでも緊張感が続くことになります。子どもがひとり立ちして運転するまでに、こういうエピソードは数限りなくあります。今になって気づくのですが、親子の信頼関係を悪くするきっかけは、こんな体験から始まるのでしょう。

ナルト君とユンタ君（右）

＜誰のための杖＞

アメリカの教育を受けた我が家の子ども達は、基本的に「自分で考えて行動する」ことを誇りにしています。それは、多分、自分で考えて行動した結果がどうであれ、その行動に対する責任を、自分自身に持たせる意味があるのだろうと、私は勝手に解釈しています。

ナルちゃんの場合、大人たちがつい手を出してしまうは、赤ちゃんのためもありますが、自分自身の「安心感」を得るためのものでもあるのでしょう。ナルちゃんを取り巻くそのような環境を無視することはできません。また、大人たちが作り出す「ころばぬ先の杖」の是非を問うことも、あまり意味がないのかもしれません。ですが、知らずに「ころばぬ先の杖」を身に付けたとしても、将来、その選択の責任はナルちゃん自身が取るのです。それはどの国で育っても同じでしょう。

松本 康子　（まつもと やすこ）

1979 年、夫の留学で、1歳半の長女を帯同し渡米。その後、アメリカで次女、三女を出産。専業主婦として子育てと教育を担当。

子ども達は、親から見てうらやましいバイリンガル・バイカルチャーの大人に育ちました。しかし、「アメリカで日本人の子どもをバイリンガルに育てた」私が、実は、子どもに育てられていたのです。このコラムでは、「海外でともに育った母と子」の姿を紹介させていただきます。

皆さんの海外での子育ての参考になりますでしょうか？

康子さんにはまだお孫さんがいませんが、ナルちゃんを孫のようにかわいがっている康子さんの姿が目に見えるようです。

しかし、他のおばあちゃん（？）と少し違って、自分自身がアメリカでの子育てで学んだ見方や考え方が、頭の中をよぎっています。

異文化の中で育った子ども達に、母親として多くのものを教えられてきた。このコラムで繰り返し出てくる康子さんのテーマです。

ナルちゃんは康子さんの姪の赤ちゃんです。ご自分の娘さんの赤ちゃんの時でも、このように冷静に観察し行動できるでしょうか、康子さん？